

アミ語の接語・接辞の分類に関する試論

今西一太

imanishik923@gmail.com

キーワード：アミ語、オーストロネシア語族、語、接語、接辞

要旨

本稿ではアミ語形態論、特に語、接語、接辞の違いについての議論を扱う。アミ語における語は (1) 独自のアクセントを持つ、(2) 単独での発話が可能である、という二つの特徴を持つと定義する。また、接語、接辞の違いは、(1) 接語は様々な形態素に付属するが、接辞は特定のものにはつかない、(2) 接語は音韻的規則に従わないことがある、(3) 接語は付属対象に付属した際に予測不可能で恣意的な意味を生じることが無いが、接辞は生じることがある、の3つと定義する。

以上の基準をいくつかの形態素に当てはめることで、これまでの先行研究で語として扱われてきたもののうち幾つかを接語や接辞であると分析する。扱う形態素は格標示の ku=, tu=, nu=, u=, i-, nai-, ci-, ni-, ci...-an, ca-, na-, ca...-an、相を表す =tu, =hu、様態や引用を表す =sa, =han および人称代名詞の属格 =aku, =isu, =ita である。定義に当てはめた結果、これらはすべて語ではなく接語または接辞であると分析する。分析対象のすべての形態素を分析すると、アミ語の中の語から接語、接辞に至る連続体を観察することが出来る。

1. はじめに

本稿の目的は、台湾原住民語のひとつであるアミ語¹の形態論を分析し、接辞、接語 (clitic)、語の分類を行ってアミ語文法の中での接語の役割を明らかにすることである。これまでのアミ語の記述で接語に関して記述を行った文献はChen (1987)、Imanishi (2009)、Wu (2015) などがある。以下の議論では主に Chen (1987)、Imanishi (2009) および Wu (2015) の議論を発展させ、

¹ アミ語はオーストロネシア語族に属する言語で、台湾の東部海岸沿いに住むアミ人によって話されている言語である。アミ人自体は15万人～20万人いるが、40代以下の世代はアミ語を流暢に喋ることが出来ない事が多いため、実際の母語話者は民族数の半分以下である。文字表記で注意を要するものは以下：<e>=[ə]、<c>=[ts] (ただし<i>の前で[te])、<s>=[s] (ただし<i>の前で[se])、<y>=[j]、<d>=[t~d]、<'>=[ʔ]、<u>=[u~o]、<i>=[i~e]。本稿で用いる例文のうち、出典を明示していないものは全て著者自身がアミ人の調査協力者(台東県長濱出身の中部方言話者)から聞き取り調査で得たものである。本稿のデータはChen (1987)からの引用を除いてアミ語中部方言のデータであり、方言によっては違う分析結果となる可能性がある。本稿では以下の略号を用いる：SG 単数、PL: 複数、PLINC 複数包括形、PLEXC: 複数除外形、NOM: 主格、GEN: 属格、POS: 所有格、ACC: 対格、LOC: 場所格、ABL: 奪格、PRE: 述部、PFV: 完了相、IMPF: 未完了相、LNK: リンカー、FCT: 事実法(「確かに～だ」という確定的な発言を示す)、NMLZ: 名詞化。

これまで語として扱われてきた形態素の一部が接語（あるいは接辞）としての特徴を強く持っていることを示し、アミ語形態論に新たな提案を行う。

以下、第2節では先行研究を概観する。第3節では Zwicky and Pullum (1983)、Aikhenvald (2002)、Spencer and Luís (2015)などを参考にしつつアミ語における語、接語、接辞の定義を提案する。第4節以降では今回の分析対象となるそれぞれの形態素について、語であるか、接語であるか、接辞であるか、第3節の基準を元にして分析する。

2. 先行研究の概観

本節では、アミ語における語、接語、接辞の区別を扱った先行研究の紹介を行う。ブヌン語などの他の台湾原住民語では接語を中心的に扱った研究があるが（例えば Li 2010）、アミ語において接語の分析を詳細に行っている研究は現状では皆無である。本節ではアミ語の接語について言及のある論文をいくつか取り上げ、その紹介を行う事で次に続く節の議論の土台とする。

Chen (1987: 135) は以下の人称代名詞の表を示し、一部の属格代名詞が前接語 (enclitic) であると述べている²。

表1 Chen (1987) によるアミ語ナタウラン方言の人称代名詞パラダイム

	1SG	2SG	3SG	1PLINC	1PLEXC	2PL	3PL
TOP	ako	iso	cira	ita	ami	amo	ohni
NOM	kako	kiso	cira	kita	kami	kamo	kohni
GEN	nako	niso	nira	mita	niam	namo	nohni
GEN	nomako	nomiso		nomita	niniam		
GEN	ako	iso		ita		amo	ohni
ACC	----	----	----	----	----	----	----
LOC	itakoan	itisoan	iciraan	itamian	ititaan	itamoan	itohnian

Chen (1987: 136) はこの中で属格の ako、iso、ita、amo、ohni の5つが前接語であると述べている。その理由は、これらの代名詞は音韻的には独立しているが、付属対象の名詞とこれらの属格代名詞の間に別の要素が入ることが無いからである、と述べている。

Imanishi (2009) はこれと同様に aku、isu などの代名詞を前接語として扱っている。さらに、完了相、「もう」という意味を表す tu、未完了相、「まだ」を表す hu という形態素についても、独自のアクセントはあるものの、前にある語との間に間隔をあけて発音することがない、という理由で前接語として扱っている (Imanishi 2009: 55)。

² 表の中は Chen (1987) の表記法をそのまま写しているため、本稿の他の場所で用いているのと違う表記法が含まれる。

- (1) Minginúy=tú 「シャワーを浴びなさい！」
 シャワーを浴びる=PFV

Lin (2013) は Imanishi (2009) と同様、完了相、「もう」を表す *tu*、未完了相、「まだ」を表す *hu* を前接語として扱っているが、その根拠は明確に述べていない。

- (2) Lumwad=tu cingra 「彼は起きた」³ (Lin 2013: 31)
 get.up=PFV 3SG.NOM

また、Imanishi (2009:144) と Lin (2013) では、Huang (1995)、Wu (2006)、Kuo (2015) など多数の文献で語として扱われている *ci* という形態素を接辞として扱っている。*ci* は固有名詞の前に置く格標示の一種である。著者の知る限り、Huang (1995)、Wu (2006)、Kuo (2015) などこれまでのアミ語研究では Imanishi (2009) と Lin (2013) の二つを除き例文内で全て *ci* は分かち書きされており、語として記述されている。

- (3) Ci Sawmah kaku 「私はサウマハです」 (Wu 2006: 76)
 PPN⁴ サウマハ 1SG.NOM

- (4) Ci-Kacaw kaku 「私はカツァウです」 (Imanishi 2009: 69)
 PRE-カツァウ 1SG.NOM

この *ci* については本論文の以下第5節で分析を行い、これは語ではなく接辞と分析すべきであることを示す。

Wu (2015) は上記の Chen (1987) や Lin (2013) を引用しつつ、属格の代名詞や上記の *tu*、*hu* が接語である可能性に言及し、さらなる研究が必要であると述べている。

3. 語、接語、接辞の分類基準

アミ語の形態素を分析するに当たり、第3節ではまず語、接語、接辞の分類基準について述べる。「語」という単位が何を示すかについては数多くの議論がある (Dixon and Aikhenvald 2002、Booij 2007 など)。しかし、本稿の目的は語の詳細な定義を行うことではないため、ここではアミ語の言語記述に適しており、かつ言語記述一般において広く受け入れられている (5) の定義を用いる。

³ 他の文献からのクロスや分析に関して、本稿の目的である接語の分析に関係の無い部分は、今西の分析に合うように原典から少し変更してある。

⁴ PPN は Wu の用いている略号で、personal proper noun を表す。

(5) 「語」の定義：以下の両方を満たす形態素を語とみなす

- a. 音韻的に独立している（独自のアクセントをもつ）
- b. 単独での発話が可能である⁵

アミ語では、疑問文を除いてアクセントは最後の音節に落ちる⁶。

(6) Midangúy kakú 「私は泳いでいます」
泳ぐ ISG.NOM

上記の例文では midanguy と kaku の二つが独自のアクセントをもつ。また、どちらも単独での発話が可能である。

(7)

- a. Midanguy 「泳いでます」（「あの人何してるの？」などの質問への返答として）
- b. Kaku 「私です」

以上二つの理由により、この両者は「語」とであると認定される。以上二つの定義に当てはまらない形態素は接辞、もしくは接語であると考ええる。

接辞と接語の違いについては、Zwicky and Pullum (1983)、Aikhenvald (2002)、Spencer and Luis (2015) などに様々な判定基準がリストされている。これらの中からアミ語の記述に適したものを選び、アミ語文法の中で両者を以下のように区別する。

表2 接辞と接語の区別

	接辞の特徴	接語の特徴
a. 付属対象	名詞のみ、語のみ、など限定されている	様々な品詞に付属したり、語だけでなく句や節に付属したりする
b. 音韻的特徴	音韻規則に従って付属対象の語の一部になる	音韻規則に従わず、語の一部にならない
c. 意味的な規則性	不規則で予測不可能な意味が生じる場合がある	規則的で意味の予測が可能

⁵ メタ言語的内容の会話で単独に発話している例はこの定義に当てはまらず、語とは見做さない (Booij 2007: 282)。Dixon and Aikhenvald (2002: 11) などが述べるように、この「単独発話が可能」という定義には問題点も存在する。しかし本稿ではアミ語の語、接語、接辞の分類の出発点としてこの定義を用いることにする。この定義を語の定義から除いた場合、本稿の分析で接語となるいくつかの形態素は語と分析することも可能になる (脚注 11 参照)。

⁶ 疑問文では最後の単語、もしくは疑問詞の最後から二番目の音節にアクセントが落ちるが、本稿の議論に影響を与える問題ではない。以下、アクセントを明示したい場合、アクセント記号と共に太字と下線を使用する。

例えば、動詞接辞の **mi-** という例で以上の基準を検討する。**mi-** が付属するのは名詞語幹のみであり、付属対象は非常に限定されている。音韻的には独自のアクセントを持たず、完全に付属対象の名詞の一部となる。

(8) **mi-tilid** 「勉強する」 (**tilid** 「本、文字」)

また、**mi-** を付けることによって予測不可能な意味を生じる例がいくつもある。例えば **r<um>akat** 「歩く」という接中辞 **<um>** が通常付属する名詞語根 **rakat** 「歩行」に **mi-** を付けると、「死者を弔うためなど何らかの目的を持って歩く」という予測不可能で恣意的な意味が生じる。また、**ma-ulah** 「好きだ」という通常 **ma-** の付属する **ulah** 「愛」に **mi-** が付属すると、「自分の意志ですすんで何かを好きになる」という意味になる。

(9)

- a. **r<um>akat** 「歩く」
- b. **mi-rakat** 「死者を弔うためなど、何らかの目的を持って歩く」
- c. **ma-ulah** 「好きだ、好む」
- d. **mi-ulah** 「自分の意志ですすんで何かを好きになる、好む」

以上より、動詞接辞 **mi-** は接辞としての特徴にすべて当てはまる。言わば接辞の原型 (prototype) であると言える。

以上、動詞接辞 **mi-** において行ったのと同様の分析をそのほかの形態素にも当てはめることにより、その形態素が語、接語、接辞のどれに当たるのか分類を行っていく。

4. 格標示 **u=, ku=, tu=, nu=**

第4節から第7節ではアミ語の具体的な形態素の分析を行う。まず第4節で扱う形態素は **u=, ku=, tu=, nu=** の4つである。この4つはいわゆる「格標示」のために用いられる形態素である⁷。**u=** は述部、**ku=** はその文の話題 (topic) となる名詞句を示す。**nu=** は所有を表す属格である。**tu=** は動作の対象や受け取り手、材料など、動詞によって様々な意味を表す格であるが、もともと典型的な用法は対格的な用法、つまり動作の対象を表す用法であるため、ここでは対格と名づける⁸。

この4つの形態素は多くの先行研究で語として扱われている (Huang 1995、Wu 2006 など)。

⁷ アミ語はいわゆる「フィリピン型」の態を持つ言語であり、述部や文の話題が格標示の一種として標示され、対称的な態の交替 (symmetrical voice alternation) を示す言語である。フィリピン型の態の体系については、詳しくは Himmelman (2005) などを参照されたい。

⁸ 本稿ではこの格を対格と呼ぶが、与格 (dative) と呼ぶ研究もある (Wu 2006)。

(10)

- a. U amis ku wawa 「その子供はアミ人です」 (Huang 1995: 220)
 PRE アミ人 NOM 子供
- b. Mala'up nu wacu ku wawa ni panay 「パナイの子供は犬に追われた」
 追われる GEN 犬 NOM 子供 GEN パナイ (Wu 2006: 81)
- c. Icuwa kisu k<um>a'en tu 'may? 「君はどこでご飯を食べる？」
 どこ 2SG.NOM <UM>食べる ACC ご飯 (Lin 2013)

どちらも nu=、ku=、u=などを独立した単語として分ち書きしているのが分かる。本稿ではこれら4つの形態素を以下の理由により接語であると分析する。

まずはこれらの4つの形態素が上記第3節の定義 (5) を満たすかを分析すると、(5a) (5b) どちらも満たさないことが分かる。つまり、これらの4つの形態素は独立したアクセントを持たず、単独での発話は不可能である。

(11)

- a. U=malingadáy ku=tamdáy 「その人は農家です」
 PRE=農家 NOM=人
- b. tamdáy nu=cepú' 「ツポ (出身) の人」
 人 GEN=ツポ (地名)
- c. Mi'acá kakú tu=tití 「私は肉を買います」
 買う 1SG.NOM ACC=肉

これら4つの形態素が単独で発話された例は今まで記録されていない。以上二つから、これら4つの形態素は語ではないと判断する。

次に、これらが接辞であるか接語であるかを分析すると、典型的な接辞とは異なり、接語の特徴が見られることが分かる。例えば、これらが付属するのは名詞だけでなく、関係節⁹を含む句や atu 「〜と」という並列の接続詞で結ばれた句であることがある。

(12) それぞれの格標示が意味的に修飾している句を [] で示す

- a. Ira ku=payci nu=[nai-dipung-ay a tamdaw] 「日本から来た人はお金持ち」
 ある NOM=金 GEN=[ABL-日本-NMLZ LNK 人] (直訳: 日本から来た人のお金がある)
- b. Tayni=hu ku=[mama atu wina=aku] i-taiwan 「私の父母は台湾に来たことが無い」
 来る=まだ NOM=[父 と 母=1SG.GEN] LOC-台湾 (直訳: 私の父母はまだ台湾に来る)

⁹ アミ語の関係節は従属部の動詞を -ay で名詞化し、その句と主要部の名詞をリンカー a で結ぶことによってつくられる。mikilim tu=wawa (探す ACC=子供) 「子供を探す」、mikilim-ay tu=wawa a tamdaw (探す-NMLZ ACC=子供 LNK 人) 「子供を探している人」

- c. Masanga nu-Kawas ku=pala'eday tu=[i-fafaeday atu i-kala'nuay a nanum]
 作られた GEN-神 NOM=中間 ACC=[LOC-上 と LOC-下 LNK 水]
 a palaliyas 「神は上にある水と下にある水を分けた」 (The Bible Society 1997: 1)
 LNK 分ける (直訳: 神によって上と下にある水で中間が作られ、そして分けられた)
- d. u=[fangcal-ay a paniyaro'an] itini 「ここは村を作るのにいい場所だ」
 PRE=[良い-NMLZ LNK 村を作る場所] ここ (呉 2013: 492)

また、これら4つの形態素は付属対象の名詞との組み合わせによって特殊な意味になったりする例はなく、動詞の意味、文全体の意味によって解釈が決まっている。つまり、ku= (主格) の付属した語句はその文の話題を表すし、nu= (属格) の場合は所有や上記 (12c) のような動作主、tu= の場合は動詞によって対象や受取人、道具を表す。付属対象によって意味が不規則に変わることはない。

以上の理由により、u=、ku=、tu=、nu= の4つの形態素は語でも接辞でもなく、接語であると結論する。

5. i-, nai-, ci- など

本節では場所格 i-、奪格 nai-、および人を表す固有名詞に用いられる ci- という形態素とその変化形の分析を行い、これらがいずれも接辞であることを示す。まずは場所格の i- と奪格の nai- について分析を行い、その後に ci- などの分析を行う。

場所格 i- は多くの先行研究で前置詞として扱われてきた。一例を以下に挙げる。

- (13) I tini midateng kaku 「私はここで野菜を食べている」
 LOC ここ 野菜を食べる 1SG.NOM (Wu 2006: 77)

奪格 nai- に関しては記述のある文献がほとんどないのが現状であるが、例えば Imanishi (2009) では奪格の前置詞として扱われている。本稿ではこの両者を第3節の基準に則って分析した結果、どちらも語ではなく接辞であるという結論に達する。

まず、i-、と nai- は第4節で扱った4つの格標示と同様、独自のアクセントを持たない。つまり、音韻的に非独立である。

(14)

- a. I-Dipúng ku=mamá=akú 「私の父は日本にいます」
 LOC-日本 NOM=父=1SG.GEN
- b. Nai-Dipung-áy kakú tayní i-Taiwán 「私は日本から台湾に来ました」
 ABL-日本-FCT 1SG.NOM 来る LOC-台湾

また、i- や nai- が単独で発話された例は記録されていない。よって、これら二つの形態素は語ではない。

次に接辞と接語の区別についてこの二つを分析すると、接辞と接語のどちらの特徴も持っていることが分かる。まず接辞としての特徴として、これらは語に付属することはあるが、句や節に付属することはないことが挙げられる。

(15) 関係節とその主要部を [] で示す (12c の再掲)

Masanga nu-Kawas ku=pala'eday tu=[i-fafaeday atu i-kala'nuay a nanum]
 作られた GEN-神 NOM=中間 ACC=[LOC-上 と LOC-下 LNK 水]
 a palaliyas 「神は上にある水と下にある水を分けた」 (The Bible Society 1997: 1)
 LNK 分ける (直訳: 神によって上と下にある水で中間が作られ、分けられた)

(15) の例では、並列の接続詞 atu で二つの名詞が連結された際、その前後の単語の両方に i が付属している。第4節 (12b) の ku= などの例では、atu でつながれた名詞の両方に ku= などが付属することではなく、ku= は一つだけで両方共の名詞を修飾することが出来た。つまり、ku= などは atu でつながれた名詞二つ (句) を修飾する接語であり、i- と nai- は句に付属せず名詞のみに付属する形態素であり、接辞の特徴を持つことを示している。

一方、i- と nai- が接語としての特徴を持っている場合もある。例えば、これらの形態素は付属する要素によって恣意的な意味の変化を生じることはない。i- は基本的に場所格、nai- は奪格を表すという事は一定している。以下 (16) のように、場所格 i- が人称代名詞に付属した際、場所ではなくて動作の対象を表す例はあるが、これも人称代名詞に付属した場合は必ず動作の対象の意味を表す、という風に付属対象によって一貫した意味を表している。

(16) Mitenuk kisu i-takuwanan 「お前は私を蹴った」
 蹴る あなた LOC-1SG.ACC

この点から考えると、i- と nai- の両者は mi- のような原型的な接辞とは異なり、ある程度接語の特徴も持っていると言える。

以上の理由により、i- と nai- は、動詞接辞 mi- のような原型的な動詞接辞ではないが、第4節の ku など4つの形態素とも異なり、性質としては接辞の特徴も持つと結論付ける。

次に人を表す固有名詞の格標示である ci- 及びそれに関連した形態素を扱う。これも先ほどの i-、nai- と同様、mi- のような原型的な接辞ではないか、ku= などに比べると接辞としての特徴を持つ。

まず、音韻的に非独立であり、単独での発話の例が無いことから、これは語ではない。

(17)

- a. Ci-Kacáw kakú 「私がカツァウです」
 PRE-カツァウ 1SG.NOM
- b. Kakú ci-Kacáw 「カツァウは私です」
 1SG.PRE NOM-カツァウ

また、ci- の付属対象は Kacaw 「カツァウ（人名）」など人を表す固有名詞のみであり、句に付属する例は見つかっていない。よって、「付属対象が限定されている」という接辞の特徴を持つことが分かる。

また、ci- の付いた固有名詞を並列する際は必ず両方の名詞に ci- を付ける必要がある。

- (18) ci-Kacaw a ci-Panay 「カツァウとパナイ」
 PRE-カツァウ LNK PRE-パナイ

第4節で扱った ku= などの4つの形態素は、名詞の並列が起こった場合に繰り返さず、atu という接続詞でつなぐという事を見た。

(19) 並列された名詞を [] で示す (12b の再掲)

Tayni=hu ku=[mama atu wina=aku] i-taiwan 「私の父母は台湾に来たことが無い」
 来る=まだ NOM=[父 と 母=1SG.GEN] LOC-台湾 (直訳：私の父母はまだ台湾に来る)

atu をリンカーの a と対格の tu= の組み合わせである、と分析すれば、(19) のような例では格標示を mama と wina の両方の名詞に格標示を付けていると解釈することも出来るかもしれない。しかし、それは以下の二つの理由で根拠が乏しいと言える。まず、ku= が付属する主格の句になぜ tu= という対格の標示が使われているのかという問題が生じる。*ku mama a ku wina のようにどちらにも主格の標示があれば、ku= が両方の名詞に付属しており、ku= は接辞であると分析することは可能かもしれないが、実際は ku mama a tu wina である。次に、呉(2013: 2, 13) はアミ語母語話者の意見として、aci については a と ci に分けることが出来ると述べているが、atu については a と tu に分けられるという記述はしていない。語源的に考えると、atu はもしかするとリンカーの a と 対格の tu をつなげたものが起源かもしれないが、以上の二つの理由により、少なくとも共時的には atu というのは分割できない一つの接続詞であると分析するのが妥当である。

(17) の例にあるように、ci- は人を表す固有名詞の述部、主格を表す。このほか、人を表す固有名詞は数と格によっていくつかの種類格標示を受ける。単数対格は ci-...-an という接周辞で、単数属格は ni- という接頭辞、複数の場合は ca-、na-、ca-...-an で表現する。

表 3 名前を表す固有名詞の格標示

	主格・述部	属格	対格
単数	ci-	ni-	ci...-an
複数	ca-	na-	ca...-an

これらの形態素も Wu (2006) など多くの先行研究で接辞ではなく語として分析されてきている。例えば ci...-an の場合、(20a) のように ci が語、-an が接尾辞として、ca-、ni-、na- は前置詞として扱われてきた。しかし、ci...-an の ci-、ni-、na- も全て (17) 等の例で分析した主格・述部接頭辞の ci- と同様に、接辞としての特徴を強く持つ。すなわち、アクセントを持たず、固有名詞にしか付属しない。よって本稿の分析ではこれらをすべて接辞と考える。

(20)

a. Mipalu ci Sawmah ci Mayaw-an (Wu 2006: 70)

MI-殴る NOM サウマハ ACC マヤウ-ACC

「サウマハはマヤウを殴った」

a. Mipalu ci-Sawmah ci-Mayaw-an (本稿の分析)

MI-殴る NOM-サウマハ ACC-マヤウ-ACC

「サウマハはマヤウを殴った」

c. Makaen ni Lekal ku titi aku 「私の肉はルカルに食べられた」 (Lin 2013: 47)

食べられた GEN ルカル NOM 肉 1SG.GEN

d. Makaen ni-Lekal ku=titi=aku 「私の肉はルカルに食べられた」 (本稿の分析)

食べられた GEN-ルカル NOM=肉=1SG.GEN

e. I luma' na Ngaday kaku kumaen tu hemay (Lin 2013: 45)

LOC 家 GEN.PL. ガサイ 1SG.NOM 食べる ACC ご飯

「私はガサイの家でご飯を食べます」

f. I-luma' na-Ngaday kaku kumaen tu=hemay (本稿の分析)

LOC-家 GEN.PL.-ガサイ 1SG.NOM 食べる ACC=ご飯

「私はガサイの家でご飯を食べます」

ku= などの4つの形態素と ci- の違いを示す例はもう一つある。以下の例文では述部標示 u と指示詞 ra が組み合わさった ura の後に ci-Kafu'uk という人名に主格の標示が付いた形が用いられている。

- (21) **ura=ci-Kafu'uk** **hananay** **misimsim=tu** **tu=falucu'**
 PRE.それ=PRE-カフオオク に関して言えば 考える=PFV ACC=心
 「そのカフオオクについて言えば、心で考えた。」

この例では **ura** という述部の標示が既に付いているにもかかわらず、**Kafu'uk** という固有名詞には **ci-** という接頭辞が付いている。この **ci-** を省略することはできない。これにより、**u=** などの格標示の系統と **ci-** などの格標示の系統は違うレベルに属していること（本稿の分析では前者は接語、後者は接辞）が強く示唆される。義務的な接尾辞という点から、**ci-** などは人名固有名詞の屈折（**inflection**）による格変化なのではないかとの分析が可能である。

6. =tu, =hu

=tu および =hu は完了相、未完了相や「もう、まだ」という意味、命令を強めたり弱めたりする意味を表す形態素であり、述部の最後に付属する。本稿ではこれらの形態素を接語として分析する。

(22)

- a. **Minginguy=tu** **kaku** 「私はもうシャワーを浴びました」
 シャワーを浴びる=PFV 1SG.NOM
 b. **Minginguy=hu** **kaku** 「私はまだシャワーを浴びています」
 シャワーを浴びる=IMPF 1SG.NOM

この両者は場合によって独自のアクセントを持ったり持たなかったりすることが確認されている。

(23)

- a. **Mingingúy=tú** 「シャワーを浴びなさい（強い命令）」
 シャワーを浴びる=PFV
 b. **Mingingúy=tu** **cingrá** 「彼はシャワーを浴びた」
 シャワーを浴びる=PFV 3SG.NOM
 c. **Mingingúy=hú** 「シャワーを浴びて頂けますか（丁寧な命令）」
 シャワーを浴びる=IMPF
 d. **Mingingúy=hu** **cingrá** 「彼はまだシャワーを浴びている」
 シャワーを浴びる=IPFV 3SG.NOM

このうち、(23b) (23d) のような完了相、未完了相を表現する =tu、=hu は独自のアクセント

がない。(23a) (23c) のように命令を強めたり弱めたりする場合の **tu=**、**=hu** には独立したアクセントがある。すなわち、完了相、未完了相を表す **=tu**、**=hu** に関して言えば、音韻的に見て語ではないと断言できる。

それでは、音韻的に独立しているという理由で命令の強弱を表す **=tu**、**=hu** は語として考えられるかと言うと、この両者が単独で発話された例は今まで見つかっていないため、それは難しい。そもそも命令を強めたり弱めたりするのがこの両者の機能なので、命令の本体（動詞）が存在しない状況でこれらを用いるという状況が想定しづらい。よって、意味の如何を問わず、**=tu**、**=hu** は語ではないと考えることが出来る。音韻的には語であるが形態的には語ではない例である（Dixon and Aikhenvald 2002）。

次にこの両者が接辞であるか接語であるかの分析を行うと、この両者は間違いなく接辞ではなく接語であるという事が出来る。理由を以下述べる。

まず、完了相、未完了相を表す **=tu**、**=hu** を検討すると、アクセントの分布から言ってこの両者は非常に特殊であることが分かる。アミ語は語の最後の音節にアクセントが落ちるのが規則であるが、**=tu**、**=hu** に関しては明らかに動詞を意味的に修飾しているにも関わらず、語のアクセントは動詞の最後の音節から移動しない。

(24)

- | | | |
|------------------------|---------------|------------------|
| a. Mingingúv=tu | cingrá | 「彼はシャワーを浴びた」 |
| シャワーを浴びる=PFV | 3SG.NOM | |
| b. Mingingúv=hu | cingrá | 「彼はまだシャワーを浴びている」 |
| シャワーを浴びる=IPFV | 3SG.NOM | |

つまり、両者は音韻的に動詞の一部になっているとは言い難い。音韻的な規則（アクセントが最後の音節に落ちる）の外側にあるという、典型的な接語の特徴を持つ形態素である（Spencer and Luís 2015: 84）。

また、**=tu** に関しては上記のように動詞だけでなく、代名詞の直後に現れる例も見つかっている。

- (25) **Kaku=tu** 「私です（私の番です、私の事です、など）」
1SG.PRE=PFV

これは付属対象が限定されておらず、名詞にも動詞にも付属するというを示している。**=tu** はこの点で接語の特徴を持っている¹⁰。

また、**=tu**、**=hu** が付属する形態素によって予測不可能な意味を生じる例は報告されていない。

¹⁰ **=tu** では (25) のように名詞に付属する例が見つかっているが、**=hu** に関して同様の例があるかどうかはまだ分かっていない。今後の調査が必要である。

=tu は「完了相・『もう』・強い命令」、=hu は「未完了相・『まだ』・丁寧な命令」を表すということで一貫している。これは接辞としての特徴（付属対象によって予測不可能で恣意的な意味を持つことがある）を持っていないという事を示している。

上記全てを検討に入れた結果、=tu、=hu は

- ・相、「もう、まだ」、命令の強弱を表すものは典型的な接語
- ・命令を表すものは語に近い特徴を持つ接語（独自のアクセントをもつため）

であるという事が出来る。

7. =aku, =isu, =ita, =sa, =han

本節では以下の二つの項目を扱う：人称代名詞の属格である =aku、=isu などと、引用や様態などを表す =sa および =han である。この両者は独自のアクセントを持つものの、単独での発話が不可能であることから、語に近い特徴を持つ接語であると分析する。

まず、第2節で Chen (1987) を引用した際に述べたように、=aku、=isu などの人称代名詞の属格は独自のアクセントをもつ。

(26)

- a. **wawá=akú** 「私の子供」
子供=1SG.GEN
- b. **fafahí=isú** 「あなたの奥さん」
奥さん=2SG.GEN
- c. **widáng=itá** 「私達の友達」
友達=1PLINC.GEN

この点ではこれらの形態素は語の特徴を持つ。一方、これらの形態素は単独での発話を行うことが不可能である。

(27) Wu (2006: 87-88)

- a. Nima wawa kuni 「この人は誰の子供ですか？」
誰.GEN 子供 この人
- b. *Aku 意図した意味：「私のです」
1SG.GEN

こういう場合は、「所有格」と呼ばれるもう一つの形を用いる。

(28) Wu (2006: 87)

a. Nima wawa kuni 「この人は誰の子供ですか？」

誰.GEN 子供 この人

b. Maku 「私のです」

1SG.POS

この現象は2人称単数の =isu、1人称複数の =ita でも同じであり、属格単独での発話は不可能で、単独での発話をする場合は所有格を用いる必要がある。この点では =aku、=isu、=ita の3つは語としての定義に当てはまらない。

次のこれらが接辞であるか接語であるかの分析を行うと、この3つは接語としての特徴を強く持つことが分かる。

まず、これらの属格形態素は動詞にも名詞にも付属する。また、これらの形態素は被動者態 (undergoer voice) の動詞に付属することにより、動作主を表す。(29) の例文を参照されたい。

(29)

a. luma'=aku 「私の家」

家=1SG.GEN

b. Mapalu'=aku cingra 「彼は私に叩かれた」

叩かれた=1SG.GEN 3SG.NOM

c. Mapalu'=isu cingra 「彼はあなたに叩かれた」

叩かれた=2SG.GEN 3SG.NOM

d. Mapalu'=ita cingra 「彼は私達に叩かれた」

叩かれた=1PLINC.GEN 3SG.NOM

付属対象が特定の品詞でないというのは接語の特徴の一つであり、これらはこの点で接語の特徴を持つことになる。

また、これらの形態素は付属する形態素によって恣意的な意味は生じない。名詞に付属した場合は必ず所有の意味 (および「何かの一部」という非分離所有など、所有に関連した意味)、動詞に付属した場合は必ず動作主を表すという事は一貫している。この点でも接語の特徴を持つと言える。

つまり、=aku、=isu、=ita の3つの形態素は語の特徴 (独自のアクセントをもつ)、接語の特徴 (動詞にも名詞にも付属する、恣意的な意味を生じない) の両方を兼ね備えているという分析結果になる。しかし、単独での発話が不可能であるという点から語の特徴は比較的弱いと考えられるため、ここでは接語と分析する。=tu の例と同様、音韻的語と形態的語が一致しない例である。

次に、=sa、=han という引用や様態を表す形態素を分析し、これらも接語としての特徴を強く持つと結論付ける。まずこれらは独自のアクセントを持つ場合と持たない場合があるが、単独での発話が不可能であるという点で、=aku などと同じように典型的な語ではないと分析できる。

=sa は様態、引用、伝聞、付帯状況などを表す形態素で、日本語で言うと「～して」「～と（言う、言った）」のような意味を表す。

(30)

- a. nengneng=aku=sa 「見てみるってさ（直訳：私によって見られると（ooは）言った）」
見られる=1SG.GEN=SA
- b. rumakat cingra i-lalan=sa rumadiw 「彼は道を歩きながら歌っていた」
歩く 3SG.NOM LOC.道=SA 歌う

=sa にはアクセントがある場合とない場合がある。

(31)

- a. namakalát nu=wacú kakú=sá mataláw=tu kakú tu=wacú
噛まれた GEN=犬 1SG.NOM=SA 怖い=PFV 1SG.NOM ACC=犬
「私は（以前）犬に噛まれて、犬がこわくなった」
- b. rakát=sa tayrá i-pitilidán
歩行=SA 行く LOC=学校
「（私は）歩いて学校に行きました。」

アクセントのあるなしがどのような環境で決まるのかはよくわかっていないが、=sa の付属する語句が長い場合はアクセントがあることが多いことが分かっている。

=han は =sa に対応する被動者態のようなもので、「～されると言った」「～されることになった」など誰かの意志があつて何かが行われたという意味を表す。この =han にはアクセントが落ちない。

- (32) taladáv=han ku=suwál nu=pangcáh tu=rirá a 'alú
タラザウ=HAN NOM=言葉 GEN=アミ族 ACC=それ LNK 川

「アミ族の言葉でその川はタラザウと名づけられた（言われることになった）」

これらの形態素は単独での発話は不可能で、必ず付属対象の語句の後に現れる。よって、

- ・アクセントがない場合の =sa=han は語の定義 (5) をどちらもみなさないため語ではない
- ・アクセントがある =sa も定義を一つしか満たさないため、少なくとも原型的な語であるとは言えない

ということになる。

この二つの形態素は、語に付属する場合と節に付属する場合がある。

(33)=sa=han が付属している語句を [] で示す

a. [rakat]=sa tayra i-pitilidan (=31b)

[歩行]=SA 行く LOC-学校

「(私は) 歩いて学校に行きました。」

b. [namakalát nu=wacú kakú]=sá mataláw=tu kakú tu=wacú (=31a)

[噛まれた GEN=犬 1SG.NOM]=SA 怖い=PFV 1SG.NOM ACC=犬

「私は (以前) 犬に噛まれて、犬がこわくなった」

c. [patireng]=han ku=ra 「それを立てなさい」

[立てる]=HAN NOM=それ (直訳: それは立てられた状態にされなさい)

d. [kalikat i-kakarayan a pa'edil tu=hekal]=han nu=kawas

[光あれ LOC-空 LNK 照らす ACC=大地]=HAN GEN=神

「『空が光り、大地を照らしなさい』と神は命じた」

(33a)(33c) ではそれぞれ =sa と =han が語に付属している (rakat と patireng)。一方、(33b)(33d) では節に付属している。このように様々な要素に付属するのは接語の特徴であり、両者はこの点で接語の特徴を持っているという事が出来る。

また、付属対象によって恣意的な意味変化が生じる例も見つかっておらず、=sa は何に付属しても「様態、引用、伝聞、付帯状況」を示し、=han はその被動者態で「誰かの意志があつてそのような状態にされる」という意味になる。これも接辞ではなく、接語の特徴である。

以上から、=sa=han の両者は、場合によっては語に近い特徴を持つ接語である、という事が出来る。

8. まとめ

本稿では語、接語、接辞の定義を行った上で、アミ語のいくつかの形態素がそのうちどれに当たるのかを分析してきた。その結果、分析対象の多くの形態素が原型的な語でも接語でも接辞でもなく、それぞれの定義の中のいくつかの特徴を併せ持っていることが分かった。以上を整理すると以下の表になる。

表4 アミ語の語・接語・接辞の例

語	接語		接辞	
midangúy	=sá, =tú, =hú	ku=, tu=, nu=, u=	ci-, ni- など	mi-
kakú など	=akú, =isú, =itá	=sa, =han, =tu, =hu	i-, nai-	など
I	II	III	IV	V

I：語の定義を二つとも満たす原型的な語である。

II：音韻的には語であるが、形態的に語ではない例。アクセントはあるものの、単独での発話が不可能で必ず何かの要素に付属するという点から語と考えるのは難しい。よって、接語と考える¹¹。

III：「音韻規則の外側にある（独自のアクセントを持たないのに、音韻的に語の一部にならない）」「様々な品詞や、語と節のどちらにも付属する」などの点で、語でも接辞でもなく、接語である。

IV：「付属対象が語、固有名詞のみ、など限定されている」などの理由で、接語ではなく接辞と分析するが、下のVとは違って予測不可能な意味を生じないため、接辞の定義全てに当てはまるわけではない。

V：接辞の定義にすべて当てはまる原型的な接辞である。

9. 今後の課題

アミ語には以上で分析した形態素の他にも接語と分析できる可能性のある形態素がいくつかある。代表的なものはリンカーの a である。この形態素のアクセントについては良くわかっていないことが多く、今後の調査によってはこれを接語や接辞と分析する必要がある可能性がある。

また、=sa や =han に別の形態素が付属した例がいくつも見つかっており、これらの形態素が語なのか接語なのかを分析する必要もある。例えば satu という形態素は =sa と同じように様態などを表すのに用いる。以下 (34) を参照。

(34) Tefad satu 「(何かが) 落ちた」
 落ちる SATU

satu は上記分析した =sa (様態などを表す) と =tu (完了相を表す) の組み合わせであることが予想されるが、この形態素を分割して記述すべきか、独立したものとして接語や語と判断すべきかはまだよくわかっていない。このような形態素には他に saka, saan, sanay, sakira, hanan、

¹¹ 脚注5で述べたように「単独発話が可能である」という定義を語の定義から除いた場合、IIに属する形態素は独立したアクセントを持っているという理由で語と分析されることになる。

hananay などがある。このような形態素については、より一層のデータ収集と分析が必要である。

また、ku=、tu=、nu=、u= の4つの形態素には指示詞の付いた形およびその変形があり、これらは単独で用いられて「これ、それ、あれ」という意味を表したり、名詞に付属する形で用いられて「この、その、あの」という意味を表したりする。

表5 アミ語の指示詞と格標示の組み合わせ

	主格	対格	属格	述部
近称	kuna / kina	tuna / tina	nuna / nina	una / ina
遠称1	kura / kira	tura / tira	nura / nira	ura / ira
遠称2 ¹²	kuya / kiya	tuya / tiya	nura / niya	uya / iya

これらが単独で用いられる場合は独自のアクセントを持つが、名詞に付属する場合はアクセントが無くなり、ku= などと同じように音韻的に後に続く名詞の一部になるという特徴がある。

(35)

- a. Címa kura(=)wawá? 「あの子供は誰？」
 誰 NOM.あれ(=)子供
- b. Címa korá? 「あれは誰？」
 誰 NOM.あの

これらのうち、(35a) のように名詞に付属する用法の場合、ku= などと同じように接語と考えることが出来る可能性が高い。ku= などと同じように句に付属することが出来るかどうかなど、さらなるデータ収集と分析が必要な分野である。

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. (2002) "Typological parameters for the study of clitics, with special reference to Tariana." In: R.M.W. Dixon and Alexandra Aikhenvald (eds): *Word: a cross-linguistic typology*, 42-78. Cambridge: Cambridge University Press.
- The Bible Society (1997) *The 'Amis Bible*. Taipei: The Bible Society.
- Booij, Geert (2007) *The grammar of words: An introduction to linguistics morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Chen, M. Teresa (1987) *Verbal constructions and verbal classification in Nataoran-Amis*. Pacific Linguistics C-85. Canberra: The Australian National University.

¹² 遠称1は話し手から見えるもの、遠称2は見えないものについて用いる。

- Dixon, R. M. W. and Alexandra Aikhenvald Y. (2002) “Word: a typological framework.” In: R.M.W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald (eds): *Word: a cross-linguistic typology*, 1-41. Cambridge: Cambridge University Press.
- Himmelmann, Nikolaus P. (2005) The Austronesian languages of Asia and Madagascar: Typological characteristics. In K.A. Adelaar and N.P. Himmelmann (eds): *The Austronesian languages of SouthEast Asia and Madagascar*, 110-181. London: Routledge.
- Huang, M. Lillian (1995) “The case markers and pronominal system in Amis.” *The Journal of National Chengchi University* 70, 217-58.
- Imanishi, Kazuhiro (2009) *A basic description of the Amis language*. M.A. Thesis. The University of Tokyo.
- Kuo, Jonathan C. (2015) *Argument alternation and argument structure in symmetrical voice languages: a case study of transfer verbs in Amis, Puyuma, and Seediq*. Ph.D. Thesis, the University of Hawai'i at Manoa.
- Li, Li-ying Lillian (2010) *Clitics in Nantou Isbukun Bunun (Austronesian)*. M.A. Thesis. National Chi Nan University.
- Lin, Dong-yi (2013) *Interrogative constructions in Kavalan and Amis*. Ph.D. Thesis. The University of Florida.
- Spencer, Andrew and Ana R. Luís (2015) *Clitics: an introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wu, Jing-lan Joy (2006) *Verb classification, case marking, and grammatical relations in Amis*. Ph.D. Thesis, the State University of New York.
- Wu, Jing-lan Joy (2015) “Amis personal pronouns revisited.” In: Elizabeth Zeitoun, Stacy F. Teng and Joy J. Wu (eds.): *New advances in Formosan linguistics*, 385-406. Canberra: Asia-Pacific Linguistics, the Australian National University.
- Zwicky, Arnold M. and Geoffrey K. Pullum (1983) “Cliticization vs. inflection: English N'T.” *Language* 59, 502-513.
- 吳明義 (2013) 『阿美族語辭典』 台北: 南天書局.

On the Classification of Clitics and Affixes in Amis

Kazuhiro Imanishi

imanishik923@gmail.com

Keywords: Amis, Austronesian, word, clitic, affix

Abstract

The present paper examines morphology in the Amis language, with special focus on the differences between words, clitics, and affixes. A word in Amis is defined as follows: (1) a word has its own accent; (2) a word is a minimum free form. The differences between clitics and affixes are: (1) Clitics have promiscuous attachment, whereas affixes do not; (2) Clitics may be “outsiders” to the phonological rules; (3) Clitics are less likely to have morphological idiosyncrasies when attached to their host.

After defining words, clitics, and affixes in the Amis language, we shall move on to analyze some morphemes which have mainly been treated as words in the majority of previous studies. Those include case markers ku=, tu=, nu=, u=, i-, ci-, ni-, ci-...-an, ca-, na-, ca-...-an, aspectual markers =tu, =hu, genitive pronouns =aku, =isu, =ita, and the markers =sa and =han, which designate manner or quotation. The conclusion is that all of them cannot qualify as prototypical words; they should be considered either clitics or affixes, depending on the phonological and morphological characteristics of each morpheme. It is proposed that we can observe a continuum, whose extremes are prototypical words and affixes, and in the middle of which we can observe clitics and less prototypical affixes.

(いまにし・かずひろ 広島大学客員講師)